

2025 年度 利晶学園大阪立命館中学校・高等学校 学校評価

1 教育目標

【Be Unique】 ○「Global」 & 「Science」をアイデンティティとし、生徒一人ひとりが自らの物語（ナラティブ）を紡ぐ教育を推進する ○「未来力（生きる力・学ぶ力）」を旗印に、自律的な学習姿勢を定着させ、進学後や社会人になっても学び続けられる生徒を育成する ○「なりたい自分」を見つけ、主体的に歩みを進めるためのサポート体制を強化し、経験を軸に置いた教育を展開する
--

2 中期的目標

1 新しい教育の実践と深化 2 独自の教育理念「未来力」の体系化 3 「開かれた学校」のブランド確立 4 進学実績の組織的向上 5 生徒募集の安定と広域化 6 校務効率化と授業力の高度化
--

3 学校教育の自己診断と学校関係者評価委員会の意見

学校教育自己診断の結果と分析	学校関係者評価委員会からの意見
1 授業評価アンケート 中学校・高等学校ともに、2 回の調査を通じて 80%を超える高い得点率を維持しており、安定した教育の質が保たれている。中学校では、第 2 回の得点率が第 1 回から 0.4 ポイント微減したが、依然として高等学校を上回る評価を得ている。高等学校では、第 1 回の 81.7%から第 2 回は 81.8%と 0.1 ポイントの微増となり、ほぼ横ばいで推移しており、概ね良い結果となった。 中学 総合評価 第 1 回 84.3 第 2 回 83.9 高校 総合評価 第 1 回 81.7 第 2 回 81.8 2 保護者アンケート 多くの項目で高評価を得ており、高評価の項目は以下である。本校の新しい挑戦や教育方針が理解されていると考える。 ・わが子を入学させて良かった 90.2% ・教職員は、生徒のことをよく考えて指導している 88.9% ・教職員は、授業を改善し、わかる授業、力のつく授業の工夫をしている 78.6% ・教育課程は進路希望の実現に対応するものとなっている 80.6% ・学校生活などの諸規定は納得できるものになっている 86.3% ・挨拶や時間厳守など、社会に通用する指導がなされている 89.1% ・将来を考える、進路意識を高める指導がされている 77.6% ・施設・設備が整っている 78.3% ・部活動や生徒活動が活発に行われている 88.3% ・学校行事は楽しく充実している 84.3% ・災害・非常時の避難方法や家庭との連絡方法についてわが子は認識している。 75.0% ・ホームページにより学校生活の様子がよくわかる 74.3%	1. 委員会の体制 学校法人立命館副総長、学校法人立命館常務理事、保護者会会長、地域有識者、校長、教頭、事務長 委員会の実施日 2026 年 4 月 30 日（木） 2 自己評価の結果に対する評価 本校の教育活動に対し、温かい評価と期待の声が寄せられた。これまでの取組が有意義に機能し、志高く教育活動が推進されている点や、明確なポリシーのもとで学校運営がなされている点が高く評価された。一方で、これらの取組が生徒の成長にどのようなにつながっているかを可視化し、積極的に発信していくことの重要性も指摘された。あわせて、生徒が自立して主体的に活動するための仕組みづくりのさらなる推進が期待されている。地域からも本校の教育運営への信頼と、学びの価値向上への期待が示された。 また、委員からは他校での研修時に発生した事故について言及があった。学校行事を実施するにあたっては、生徒の安全確保が教育活動の根幹であることを再認識し、実施計画の策定から現場での運用に至るまで、入念な準備とリスク管理を怠らないよう助言をいただいた。本校としては、この助言を真摯に受け止め、安全・安心な教育環境の構築に万全を期していく所存である。

4 本年度の取り組みと達成状況

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価	次年度に向けての改善策
1 新しい教育の実践と深化	(1)サイエンス教育の重点化と実践	1 SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の実践 ・万博（イタリア・豪州館）でのプレゼン、 ・豪州・カンボジアとの国際共同研究の実践 ・生徒の意識調査の継続的实施と分析 ・大学や研究所等との連携 ・JSSF/ICR への参加 2 STEAMS 教育 ・Science Technology Art を重視した教育	1 実施状況 2 STEAMS 教育が実施できたか	1 計画通りに実施。 2/13 SSH 成果発表会を実施。 学外の大きな舞台で主体的に活動する姿が見られ、高い評価を得た 海外の学校との共同研究にも積極的に参加し、高い評価を得た。 豪州・カンボジアとの国際共同研究では、現地の生徒と積極的に関わり、発表では、All English で発表するなど生徒の活躍が見られた。 2 高校 1,2 年では STEAMS の探究授業を学年全体で取り組んだ。	1 SSH 推進機構を中心に運営。これまで進めてきた教育内容を実践し実績を上げる。 2 「おおりつ TED」等のアウトプット機会を戦略的に配置し、表現力をさらに引き出す
	(2)US コース実践	1 アングリカンインタナショナル包括提携 2 西オーストラリア大学 Celt との包括提携 3 海外姉妹校包括提携 4 ターム留学準備 5 IELTS スコア向上 6 中高大接続カリキュラムの構築	1 教育内容と入学者数 2 包括協定を締結できたか 3 IELTS Score 4 カリキュラム構築できたか	1 入学者数：33 名（30 名募集） 33 名の入学者を確保し、国際プログラムを安定運用できる体制が整った 2、3 2025 年 12 月包括提携 Emanuel College, Ocean Reef Senior High School との姉妹校提携締結 5 全国初 IELTS 全員受験、平均 4.7 最高得点 8.0 6 高校カリキュラム大枠確定	ターム留学準備講座の実施など、海外大学進学に向けたマインドセット形成を加速させる。

2	独自の教育理念「未来力」の体系化	(1) 本校独自の教育理念の打ち出し、6か年プログラムの構築	1 総合的な探究の授業運営と特色化 2 教育講演会の実施 3 研修旅行、宿泊研修の実施	1. 実施できたか 2. 実施できたか 3. 実施できたか	1 学年全教員で担当し取り組むことができた。特に高1ではGo Stem、Taste Stemと題し、SSH事業に積極的に取り組んだ。 2 「「バリアバリューが拓く未来ー多様性と共に生きる社会へ」 3 ①中学：ハミルトン(NZ)パース(AUS) 高校：インド、タスマニア、パオ、ベトナム、対馬韓国、モロッコ・スペイン、マルタ7方面で実施 ②中学：秋季研修（滋賀・九州方面）	1. 6カ年を通したプログラムの体系化。 2. 次年度は、年2回実施予定。 3. 探究テーマに結びつくテーマ設定。探究の実践により、総合型選抜での大学合格者数を伸ばす
		(2) 各コースの先鋭的・特色的な教育内容の実現	1. 立命館コース ①理系教育の推進②グローバル教育の推進 2. アドバンスト・スーパーリアコース ①総合型選抜入試への取り組み ②自主学習システムの構築	1 実施できたか 2 実施できたか	1. ①理系クラスにてatama+数学科受講 理系教育の推進ができた。課題研究では、一人1テーマを持って研究を進め、全員が発表会に取り組んだ。 ②ネイティブ教員によるSDG's/Presentationの授業実施、国際交流@APUへの参加など実施できた 2. ①教員対象の総合型選抜の研修実施 ②自主学習の時間を設定し、スタディサブリを活用した。校内にLSC（ラーニングサポートセンター）を設置し、放課後の自主学習の場を作った。	1.①atama+の学習データを分析し、個別指導の精度を向上させる。SSH事業と連携し、課題研究を外部コンテスト等へ繋げ、理系進学意欲をより喚起する。 ②.ネイティブ教員との授業をプレゼンから「議論」の段階へ引き上げ、APU交流等の経験を進路意識（国際貢献等）へ具体化させる。 2.①LSC（ラーニングサポートセンター）とスタディサブリを連動させ、「自学自習の質の分析」と「放課後講座」を一体化させた学習サイクルを確立する。②模試データの継続的な分析に基づき、総合型選抜への対応を組織化する。全教員が伴走者となり、志望理由書や面接指導の質を均質化・向上させる。
3	「開かれた学校」のブランド確立	(1) 広域連携	1. すさみ町との連携（中学） 2. 郡上八幡、奈良、滋賀での探求型宿泊研修（高校） 3. 西オーストラリア州との連携	1 連携できたか 2 連携できたか	1, 2 中高1年生のFreshers' Campにおいて、民泊・キャンプ活動、ならびに町の暮らし体験（ローカルツーリズム）を実施。生徒は新たな仲間と協働しながら地域住民との交流を深め、地域理解と協働性を育む機会となった。 3. 西オーストラリア州教育機関からの紹介で、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）国際共同研究として、Ocean Reef High School と国際共同研究を実施。今後の継続的な国際連携活動の足がかりとなった。	1.2. 体験の言語化と内省の深化、次なる活動への接続：キャンプで育んだ協働性を、日常の学級運営や総合的な探究の時間におけるグループワークの質の向上へとつなげる。 3.共同研究の質的向上と継続性、参加生徒の拡大と成果の普及
		(2) 企業等との連携	総合的な探究の時間での連携 ・高校 堺 Well-being Project Go STEM, Taste STEM	1 連携できたか 2 内容の充実度	1. IHI インフラシステム、堺市観光課とのコラボ、立命館大学女性研究者30名との懇談会などを実施	1.継続して実施。 2.SSHとUSコースでの活動を実践する。
4	進学実績の組織的向上	(1) 国公立大学合格実績の向上	コース責任者配置による個別指導強化。目標：国公立100名（早期50名）・探究での実践を体系化し、総合型選抜での合格者を伸ばす	合格者数	国公立18名。学校推薦・総合型選抜5名で課題あり	上位層を学年全体で指導する体制の再考と、精緻なデータ分析に基づく戦略的指導の徹底
		(2) 提携校推薦	1 理系進学者増に向けての取り組み ・ラボステイ ・サイエンスラボ講座 ・理系講演など ・atama+や 2 APU進学者増に向けての取り組み ・立命館DAYでのAPU講演 ・国際交流@APUなど	1 進学者数 2 進学者数	1 理系進学者53名。理工学部17名(女子5名)、情報理工学部28名(女子9名)と女子の理系進学も着実に増加している。 2 7名。昨年度2名より大きく増加した。	1 サイエンスラボや理工学部を教員が知る取り組み。 2 オープンキャンパスなどを通じ、APUの特色をアピール
		(3) 海外大学への進学	5名を目標 ・保護者向け説明会の継続実施、海外大学との連携強化	進学者数	本年度の海外大学への現役進学者は0名となった。既卒生には、イリノイ州立大学、マンチェスター大学（英国）ユニティカレッジ経由でカリフォルニア大学バークレー校へ進学した実績はあるが現役生に向けての制度確立が必要。	事前指導の研究や海外大学進学への制度づくりを推進する。
		(4) 私立大学への合格実績の向上	関関同立100～200名の合格目標。産近甲龍（特に近大）を最低ラインとした指導への転換。	進学者数	MARCH2名。関関同立29名。関関同立への合格者数は減少傾向にあり（ピーク時68名から減少）、近畿大学116名と健闘したが、目標に届かなかった	進路指導体制を根本から再検討する。産近甲龍を「実績のライン」として保証し、より高い目標（早慶・関関同立）を掲げる指導へ転換する。

	(5) コース別指導の徹底	3 責任者を置き、コース別の進路実績を向上 ①アドバンス担当 ②中学 Ada から高校 Ada への進学推進 ③Sp 進学実績向上	支援内容	①外部模試データの詳細な分析と、それに基づく学年全体での指導体制を構築。国公立大学合格実績の積み上げに向けた個別のフォローアップを実施した。 ②6 か年の一貫教育を最大限に活かすため、内部進学時の教育内容の接続を強化。中学 Ada 生の意欲を高校 Ada コースへと繋げ、高い学習継続性を確保した。 ③自主学習システム（LSC 等）の活用と、総合型選抜入試への対策を強化。生徒一人ひとりの特性に合わせたきめ細かな指導により、Sp コースとしての実績向上に注力した。	アドバンスト英数 a の学力向上を最重点課題とし、高い学力層を確実に上位私大へ繋げる組織的指導を強化する
5 生徒募集の安定と広域化	(1) 学則定員の変更を踏まえた入試広報活動の強化	1 大阪市内、北摂地域への広報活動（中学） 2 おおさか R クラブでの情報発信 3 受験生保護者対象の教育懇談会の実施	1 重点地域からの出願者数 2 登録者数 3 実施回数	1 大阪市、北摂地域から 741 名出願 内北摂地域よりの出願 15 名（昨年 7 名） 2 3 月末で約 1600 名（累計）。入試関連や学校活動の情報を発信した。 3 単独での実施できず	1 北摂、南河内、奈良など受験者の少ない地域を中心に広報活動を重点化。 2 発信数を増やし広報に繋げる 3 重点地域での実施
	(2) US コースの入試広報	US オープンデイの実施 ・校内実施 ・学園小学校対象の実施 ・外部会場での実施	1 参加者数 2 満足度	1. 参加人数 第 1 回 47 組 第 2 回 24 組 第 3 回 36 組 2. 参加者は授業内容、US コースの方針などに共感し、好評であった。特に、第 3 回の立命館大学グローバル教養学部長堀江先生による講演は保護者・児童に大変好評であった。	授業公開や説明会など、より具体的な教育内容を発信し広報活動を展開。
	(3) 中学入試	1 受験者数 1200 名を目指す 2 入学者数 180 名を目指す（うち US で 30 名の入学者確保）	1 受験者数 2 入学者数	1 1483 名が受験し、目標を達成した。 2 207 名が入学し、目標を達成した。（US コース 33 名が入学、目標到達）	1 1500 名 2 200 名（US30 名）
	(4) 高校入試	1 出願者総数 600 を目指す 2 専願（内部を含む）360 名を目指す 3 入学者数 400 名を目指す	1 出願者数 2 入学者数 3 入学者数	1 686 名。目標達成 2 438 名。目標達成 3 489 名。目標達成。	1 ・「公立と並べて選ばれる学校」としての地位を確立するため、教育内容の質的向上をさらに加速させる。 2 ・大規模な入学者に対応した学習指導体制および施設・設備の再編を急ぐ。
6 校務効率化と授業力の高度化	(1) 教室設備・改修	1 2027 年度に向けた教室の検討 2 理数教育の充実に向けた施設の検討 3 体育館の冷房施設	1 改修完了したか 2 改修完了したか 3 改修完了したか	1 2024 年度に実施した教室整備により、当面の必要教室数は確保できた。しかし、収容能力は限界に達しており、中長期的な課題が明確化した。 2 継続検討 3 完了	1 2026 年度に今年度と同規模の入学者を迎えた場合、教室が不足する。2027 年度の運用に支障をきたさぬよう、早急な教室整備計画を策定・実行する。 2 「Global & Science」の深化に伴い、音楽室・美術室・技術室等の特別教室の増室および再配置を加速させる 3 備品の充実
	(2) 情報発信・ICT の改修・充実	1 サイエンスラボ機器の充実 2 教員用貸与 PC	1 新規構築できたか 2 配布完了したか 3 機器を購入したか	1. 2 年前理工学部よりレーザー加工機が貸与されている。また、SSH の一環で 3D プリンター、各種機器を購入。昼休みには生徒が自由に使えるようにサイエンスラボを解放。中学生を中心に活用が進んでいる。 2. 全ての専任・常勤の教員に Surface を貸与。AI の研修などを通し、業務の効率化を進めている。	1 機器の充実とともに施設の効果的な運用を進める 2 サイエンスラボを昼休みや放課後に解放するため教員を常駐。SSH 教育活動でも活用しものづくりを通して理系人材の育成を進めていく。 3 教員の ICT 環境改善と AI の活用を通してより業務効率化に繋げる。